

【要旨 01】

李承晩のネーション認識に関する研究 - 1904年から1950年までの時期分析を中心に -

高城建人
神戸女子大学

本稿は、韓国初代大統領である李承晩のネーション認識に関する研究である。具体的には、彼が獄中で『独立精神』という著書を書いた1904年から韓国初代大統領に就任する1950年までの約46年間の時期を扱う。

青年期における李承晩のネーション認識は、朝鮮民族という血統を強調する点であった。実際それは、彼が著した『独立精神』からも見て取れる。しかし、血統を強調する彼の従来のネーション像は、1920年以後少しずつ変化していく。その主な変化とは、従来の血統に加え、反共主義というイデオロギー的な側面を加えたことである。

そして李承晩は、韓国初代大統領に就任した1948年以後、当時彼が打ち出した「一民主義」などの概念を通じて、血統と反共主義を併せ持つことが韓国国民の要件だと規定した。同じ血統であっても共産主義の考えを持つ人は、「非国民」として他者化する試みを行った。そして彼は、教育やメディアなどを通じて自らの考えを実行に移していく。

【要旨 02】

「民性」・「社稷」・「天」——権藤成卿の政治思想の再検討

田得霖

名古屋大学法学研究科博士後期課程

従来、権藤成卿に関する研究は、ほぼ彼を「農本主義者」または「在野史学者」として捉えているが、これら二つのアプローチは近代政治学・社会学の文脈と国民国家の枠組からはじめて成り立つものであるため、内在的に権藤の政治思想を把握することは難しい。本稿は、まず「制度学者」としての権藤成卿の自画像に注目しながら、それを当時における権藤周辺の同志や論敵が持っていた権藤像と比較したうえで、多様な権藤成卿像の起源を開示する。また、儒学思想の視点から、そのような制度学における「民性」・「社稷」などの概念を分析し、「社稷」を食衣住に還元することで国家を相対化する一方、「民性」を人間の自然的本性としてその普遍性を確認することで政治そのものを作為的なものとして相対化するという権藤の政治思想の特徴を明らかにする。さらに、彼の「天即ち自然」の表現から深く下げ、その制度学を支える思想の潜流は現に儒学的「天」の思想であることを試論する。

【要旨 03】

柳田国男の『先祖の話』における先祖観：盆に来る精霊の考察

ラハディティヤ・プспа・キラナ

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科博士後期課程

柳田国男は日本の民俗学者として知られている。『先祖の話』は、柳田の代表的な作品の一つであり、祖霊研究のテーマ的な作品とされており、日本民俗学において非常に重要とされている。『先祖の話』における柳田の先祖観は、彼の以前の作品と比較して矛盾した発展を遂げたと言われている。彼の初期の作品では、祖先は鎮める必要のある恐ろしい死霊と見なされていた。それに対して、『先祖の話』では、祖先を子孫を守護する霊と見なし、彼らと親密な関係を維持するとしている。しかし、『先祖の話』には、死者の霊を鎮め、現世を乱さないようにするための祭りであるお盆についての議論も書いてある。この事実は新たな疑問を提起す。お盆に来る精霊は、子孫を守護し、親密さを保つ祖先の霊なのだろうか？本研究の初期の発見によれば、お盆に来る精霊には、柳田の両方の祖先観が具現化されていることが示されている。これらの発見により、『先祖の話』における柳田の祖先に対する視点がより明確に理解されることが期待されています。

【要旨 04】

現代を生きる超高齢者の思想

岡崎瑞生

滋賀県立大学人間看護学部

本発表は、超高齢者の生を支えているものが何であるかの示唆を得る事を目的とする。超高齢者の思いの理解をめぐって、従来の研究では、インタビュー調査と人生史・生活史を参考に、発達理論に基づいた老年的超越や統合感、自己概念、幸福感、生活様式等の側面からサクセスフルエイジングの要素やケアの方向性について明らかにされているが、彼らが書いた自叙伝等の記録物から生を支える思想を理解するという点は検討されていない。この点について、本発表では、三村勉氏という人物に注目して考察を行う。三村氏は1932年生まれ、著書を多数出版している市井に生きる超高齢者である。

本発表の研究方法は、三村氏の著書から「生老病死」についての記載の中で頻出する言葉を抽出・整理する。その意味を彼の記述や影響を受けたであろう書物から解釈する。

以上の方法を用いて、本発表では、三村氏の「老いと成熟」についての考え方と理想の老いについて明らかにする。

【要旨 05】

『坊っちゃん』の翻案小説としての『鹿男あをによし』に関する考察

ホアン・ティ・ホン・ガー
岡山大学大学院博士後期課程

『鹿男あをによし』は、2007年に幻冬舎から出版された万城目学（1976）の第二作目のファンタジー小説である。作家自身は、翌年に発表したエッセイ集『ザ・万歩計』において、「『坊っちゃん』をきっかけに長編小説を書き、わざわざ松山まで風呂に入りに来る輩までいるくらいだ」と述べ、夏目漱石の『坊っちゃん』を基に執筆したことを述べている。『鹿男あをによし』を扱った先行研究は、『坊っちゃん』との類似点という翻案の必然性を探しているが、翻案作者が目指す意図がどのように反映されているか、また翻案作品の独自の世界観や人間観がどのように読み取られるかという点について、原典の枠組みを超えた作品としての検討が不十分である。本研究の目的は、二作品の共通する人物像および中心的な事件に着目し、その類似点から生じる相違点の効果と、原典と翻案の関係性を明らかにすることである。二作品に共通する人物像および中心的な事件を時間的距離から描き出される世界観・人間観に注目して比較検討することで、翻案作品が原典との差異を通して新たな人間像を創り出し、また、二作品の関係が相互に影響し合う可逆的なものであることを明らかにした。

【要旨 06】

安藤昌益の「人」と「病」論（仮）

尹馨憶

東北大学大学院博士後期課程

安藤昌益（1703-1762）は江戸中期の思想家であり、彼の生家は出羽国秋田郡二井田村で肝煎を務めた安藤家である。昌益は生家を離れた後、おそらく京都で医者修業をした。そして、遅くも延享元年（1744）には、奥州八戸で「町医」として生活している。

医者である昌益は「人」について特別な論述を持っており、著書の中でも「人」に関する内容は非常に豊富で、昌益の「人」と「病」論は、自然と調和した生活の中で人間がいかに生きるべきか、また病気がどのように捉えられるべきかについての考察を含んでいる。

人は社会的存在であるだけでなく、自然内の存在でもある。したがって、本論では、「人」と「病」を中心にして、昌益全体の生成論の枠組みで、人が病気になる原因を考えたいと思う。具体的には、昌益の「通・横・逆」という気の運動方式がどのように人間や万物の生成に関与し、さらに病気の発生にどのような役割を果たすかを解明することを目指している。

【要旨 07】

徳川家康の朱子学導入について―慶長年間林羅山の活動を中心に

高悦

東北師範大学

17世紀上半葉、日本社会は戦乱から安定期に移行しつつありました。新生政権を強化するために、江戸幕府は多種多様な手段を講じて統治権威を樹立し、内外の秩序を安定させました。思想文化の面では、林羅山の「脱仏入儒」の取り組みは、朱子学が五山禅僧の伝統から独立し、幕藩体制と結びつき始めることを示しています。これが体制官学として確立されるべきかどうかは、長らく学界の論点となってきました。本稿は、幕府に出仕した林羅山を対象として、彼が幕府の政治機構の中でどのような位置にあり、慶長年間の林羅山の思想と外交活動を研究対象として選び、林羅山が新しい知識を受け入れる過程と幕藩政権との相互作用を詳細に検証し、江戸初期の幕府が朱子学に対して実用主義的な立場を取ったことを明らかにします。徳川家康は林羅山の朱子学者としての地位を重視しながらも、彼を起用する過程で中華倫理価値に対する警戒心を保持しました。また、新旧知識の転換や学派間の対立は新政権の主要な考慮事項ではありませんでした。これは、壬辰倭乱後、日本の朱子学が独立して発展する条件を備えていたものの、徳川初期の幕府は実用的な観点から朱子学に接していたことを反映しています。これにより、江戸時代の日本が朱子学を代表とする中華文明を選択的に導入したことが示されます。

石川丈山の煎茶の思想的背景
—その隠棲時代をめぐって—

趙真真

東北大学大学院

本稿は、従来「煎茶道の祖」といわれる江戸初期の文人・石川丈山（1583年～1672年）による隠棲時代の漢詩について考察し、そのうえで彼の煎茶の思想的背景を探るものである。これまでの丈山の煎茶に関する先行研究は、主に「煎茶道の祖」という説を否定するものであった。また、思想史や文化史の研究において多少言及されてきたが、丈山の茶の思想的背景に関する詳細な歴史的研究はほとんどなされてこなかった。つまり、丈山を文人として視る際、彼の漢詩（茶に関する詩も含む）を儒学や老荘思想の視点から精神史的な背景を十分に解釈することが行われていない。

そこで、本論では、まず丈山が武士の世界から隠棲の世界へ、さらに隠棲の世界から「学問の道」へと転換する背景を解明する。その際、思想の内容と人脈が直接関わってくるだろう。丈山が漢詩（茶に関する詩も含む）を作る際に、唐の時代における茶道のルーツを記した陸羽や、お茶の背景にある精神世界の奥深さを詠った盧仝の思想、また江戸初期の朱子学者たちの文学観や儒学と老荘思想の交渉からの影響を考慮する必要がある。なぜなら、丈山が文人として林羅山などの文人と関わり、藤原惺窩に朱子学を学んだが、その漢詩の中でしばしば「仙客」や「逸民」などの言葉を使用しているからである。本稿は、学問と思想・文学の融合から、儒学や漢詩への関心、そして老荘思想の体現という点を問題として取り上げ、丈山の奉ずる茶の思想背景を明らかにすることを目指す。

【要旨 09】

淵岡山の安楽論

—藤樹安楽論に対する継承と革新を中心に

東北大学大学院博士後期課程

石咏絮

淵岡山（1617～1686）は、仙台生まれの隠士で、1644年に藤樹の門下に入り、藤樹心学を忠実に継承し発展させた最も重要な人物である。

淵岡山という思想家は、研究者たちの目に入る時間がまだ短く、先行研究もそれほど多くない。近年、研究者たちの淵岡山に対する研究は宗教思想、倫理思想、工夫思想及び教導思想の分析に集中しており、一般的に認められているのは岡山の藤樹心学に対する忠実な継承、及びその上で創造した日新説、取廻し説及び中墨説であり、そして岡山の思想は藤樹より日常性と実践性があり、更に人と人間の付き合いに重点を置いていると考えている。『岡山先生示教録』によると、岡山は「安楽」に関する議論が多いため、その宗教思想、倫理思想などの思想を議論する過程で必然的に岡山の安楽思想に関する主張に触れる。

しかし、安楽論の視点からみれば、岡山安楽思想を他の思想を論述する一環として、「安楽論」を中心に論述していない。そこで、本文は岡山の安楽思想を中心に、岡山の藤樹の継承発展及び革新の所在を考察し、岡山安楽思想の思想特質を明確にし、岡山を代表とする社会における藤樹安楽思想の受容をさらに明らかにすることを目指している。

【要旨 010】

1985年から2023年の朝日新聞読者投稿記事の分析による 女性の体形に対する社会意識の検討

西田洋子

川崎医療福祉大学保健看護学部保健看護学科

【目的】1985年から2023年の朝日新聞読者投稿記事（以下、読者投稿）にみられる女性の体形への意見の特徴から社会意識を検討する。

【方法】やせ・ダイエット関連の記事で女性の体形への意見のみられる読者投稿84件を投稿者の年齢により群分けし、記述内容の特徴を読み取った。データ収集期間は、2022年10月8日から2024年2月27日であった。

【結果】10～20歳代の投稿では太っていることによる他者からのからかいやマイナスの評価を受けた体験の記述ややせたことによる自信の獲得、過度なダイエットへ警鐘を鳴らす記述、10～20歳代以外の投稿では、健康な見た目が望ましいという意見、女性がやせすぎることへ警鐘を鳴らす記述がみられた。

【考察】健康的な見た目が望ましいという意識が存在する一方、10～20歳代ではやせることのメリットや太っていることのデメリットの意識の存在も示唆された。

【利益相反】なし。